

連記の糸巻

夫連家其祖元を人王十二代景行天皇四十年
日本武の公の東夷征伐の時甲斐國酒打村
ふで別をり糸巻

中村俊定文庫
文庫 18
34
1



連池系終集上

又吉如通連声
又于賦四百六十一條



夫連公此招元々人王三代景行天皇四十年



日本武の事東夷征伐乃時甲斐國酒坊此宮
ありて形なる魂政の詞より起ると云はれ
此道公教を信留物傳ふ十九、齊文を呈せ四日
からく入りて書しぬれ元々ありて書く
業事ある希にあらざる是を連公乃起りて
此上の白く書して出されざるは流石縁と云ふ者
なり唯一段進んて業事又も是を呈すなり

くさくさ之我又能くさ

一之義くさ

一、日本紫二、風系三、赤金也

一又神くさ

一、取乃月の六場めらうくさ

二、紅桂遠浪小波沈くさ

三、海家小内免くさ

四、秋志風万紫を吹鹿くさ

又、結小半は女めつを初んくさ

六、小くさ神姓仁同縁くさ白河合を感くさ

一、あつちくさは隔くさ

一、おのむきふくさ山乃鈴成

一、里つた山小泊りくさ

一、浦波のかりくさおのかり花也

一、あつちくさは山桂松系

一、波の取り紅月か

空の指や前よりん

空の指や前よりん

果をよもふぬ若を遠る

空の指や前よりん

一飲乃六我を連流か六種よりん

其六我よりん

風賦比真雅頌の六也

又連方の句にあり

一也ひる二か句ニ掛物四やう句又凡結句
六のちりし

空の指や前よりん

空の指や前よりん

何と隔て回ひ来りてん

善をよもふぬ若を遠る

新の方より掛しをいりて

空の指や前よりん

記りも店の沖はう波
山小見てうねも遠くも岸
那中を松小雨あま
ぬりぬりおんねまきかて

けまのけ白くも

一連記心お静くも夏

こもいニちかひニ栞子も先切し
うらて携るる岸の一む

け山小風のお吹て人もお

お紫菀もも誰かま

け山小風のお吹て人もお

お乃おまや凡のお

け山小風のお吹て人もお

お遠くもお招めかゝる白雲

け山小風のお吹て人もお

お山小風のお吹て人もお

一 白地連分二揚の事
さうかたし連分さうかたしは遠く二地投まは
さうかたし先切を上げさうかたし乃業を切す

一の地一け小揚り信之者

此白地一けかき河地あり
我れさうかたし揚をさうかたし

長知と水主の比一サ石

け白地サ石ササありてその
色さうかたし白地お遠く

長く水主サ石ササ

長くさうかたしは揚をさうかたし
さうかたし一ササササササササ

若の若白地信一ササササササ
長くさうかたし一ササササササ
お遠く

若のさうかたしササササ

音さうかたし信之の松風

此白地ササササササササササ
さうかたし

一 白地内白地お遠く

是の如くは... 招の... 是の如くは... 兼に教めんと... 是の如くは... 兼に教めんと... 是の如くは... 兼に教めんと...

是の如くは... 兼に教めんと... 是の如くは... 兼に教めんと...

是の如くは... 兼に教めんと... 是の如くは... 兼に教めんと...

一 連歌の... 兼に教めんと... 是の如くは... 兼に教めんと...

是の如くは... 兼に教めんと... 是の如くは... 兼に教めんと... 是の如くは... 兼に教めんと... 是の如くは... 兼に教めんと...

一 連記の支

一 連記の支

一 連記の支

一 連記の支

一 連記の支

一 連記の支

一 連記の支

一 連記の支

一 連記の支

一 連記の支

一 連記の支

一 連記の支

一 連記の支

一 連記の支

一 連記の支

一 連記の支

しんせつ 何れを時よはれ 遠くはるか 遠くあり
連飛 痛みの事

痛くもいふ方用 附の白くもわたり

引部 亦花 龍田 亦幼系 文科 又月

クア 色も 墨深き

いさみ 附物 亦花 梅から 始りて 附下 又 辨りた
也 小 辨り 物 名 の な り ぬ き あり 名 の き ぎ 附り
も を 始 り ぬ 小 辨り とも 痛く 又 墨 の 厚く 亦 花

ひらき 亦花 一 墨 花 燕 亦 花 中 へ 付 たり 又 花
ある 亦 花 乃 亦 花 乃 亦 花 一 他 花

一 名 所 連 飛 人 名 の 文

いしし 花 亦 花 一 月

水 亦 花 亦 花 風 亦 花 亦 花

川 の 水 亦 花 亦 花 亦 花 亦 花

月 亦 花 亦 花 の 山 亦 花 亦 花 亦 花

思 亦 花 亦 花 亦 花 亦 花

ねむるねのふんがうもあて

あてふらやちうのいぬ電

しらねあふくまういぬあて

一 日外れるいふ事

たふの月をいふて 音とあて

涙となふきつのかのあて 風のあて

ねむるあてのあてのあていぬあて

のふらういぬあてのあていぬあて

いぬあていぬあて

一 ねむるあていぬあて

あていぬあていぬあていぬあて

あていぬあて

あていぬあていぬあていぬあて

あていぬあていぬあていぬあて

あていぬあていぬあていぬあて

あていぬあていぬあていぬあて

ふく(龍子) 斤山 龍中 龍子
活(龍) 神 龍子 斤山 龍中 龍子
かき の 龍 方 味 あり 一 一 龍 子 斤 山 龍 中 龍 子
ふく 龍 子 斤 山 龍 中 龍 子

一 龍 子 斤 山 龍 中 龍 子

龍 子 斤 山 龍 中 龍 子
龍 子 斤 山 龍 中 龍 子
龍 子 斤 山 龍 中 龍 子

龍 子 斤 山 龍 中 龍 子
龍 子 斤 山 龍 中 龍 子

龍 子 斤 山 龍 中 龍 子
龍 子 斤 山 龍 中 龍 子

龍 子 斤 山 龍 中 龍 子
龍 子 斤 山 龍 中 龍 子

一 龍 子 斤 山 龍 中 龍 子

奥の山

奥の山に雲の山梅
奥の山に雲の山梅

ふきぬ煙をけりてふ
ふきぬ煙をけりてふ

なうては

一帯白回念の夏

川橋のふらふら山甲

又き水音の風を

一帯白回念

おひれて人の世の中

おひれて人の世の中

おひれて人の世の中

川原のふらふら山甲

川原のふらふら山甲

奥の山に雲の山梅

奥の山に雲の山梅

奥の山に雲の山梅

奥の山に雲の山梅

言はれぬおのころの
言はれぬおのころの
言はれぬおのころの

一
このめ回えは
相好は活るうまぐ
よ句をけてこのめは
赤澄しう句の赤
も開物めれを
又赤澄しうの赤

一回之中道の夏

一
川
赤澄しう句の赤
も開物めれを
又赤澄しうの赤
も開物めれを
又赤澄しうの赤

子二人二人女親の中よ度て
大姓白木河原を流し向ふ所へ
一 河原宿女直

川へ流し置けりて

流し置けりて

一 道えとて

白くはるる露も神女

大なりありてとて白くはるる露も神女

あはれつねを

一 清きもて

清きもて

此の中を字用ふまはるる

あはれつねを

しかりとて流し置けりて

一 出たつて

出たつて

トあまをぬくてあまの世に
難いことなるは
きくはる 平ぬ 不のぬ つく
白も大かんと白能くお
ふふあわすやーお
りまこ

一 解るるるるるる

初るるるるるる

ふふふふふふ

たのう招きまのな
解るるるるるるる
まじり

一 音切のうるるる

此の夜おし
夜おし
夜おし

夜おし

一 夕に女衣の里に身を續けりし

一 夕に女衣の里

夕に女衣の里に身を續けりし

此句説と入し月めても山もて入て然し

夕に女衣の里に身を續けりし

一 夕に女衣の里に身を續けりし

夕に女衣の里に身を續けりし

夕に女衣の里に身を續けりし

夕に女衣の里に身を續けりし

夕に女衣の里に身を續けりし

一 夕に女衣の里に身を續けりし

夕に女衣の里に身を續けりし

夕に女衣の里に身を續けりし

夕に女衣の里に身を續けりし

夕に女衣の里に身を續けりし

一 夕に女衣の里に身を續けりし

かゝるしをいふはなほおのちを月
しをいふはなほおのちを月

曰 正ヶセテ子へメシ

一ぬけのしるしをいふ

ついでにいふはなほおのちを月

おのちを月

此のしるしをいふはなほおのちを月

一 戸のしるしをいふ

戸のしるしをいふはなほおのちを月

おのちを月

おのちを月

おのちを月

一 戸のしるしをいふ

戸のしるしをいふはなほおのちを月

おのちを月

おのちを月

ふもつしつゝのいもめ云好しつゝのいもめ
物と責候やいつと先みしつゝのいもめす
ふもつしつゝのいもめ云好しつゝのいもめす
一 連測法と云ふ事

一 九のめ十のめ
二 九のめ十のめ
三 九のめ十のめ
四 九のめ十のめ
五 九のめ十のめ
六 九のめ十のめ
七 九のめ十のめ
八 九のめ十のめ
九 九のめ十のめ
十 九のめ十のめ

一 賦物法
二 賦物法
三 賦物法
四 賦物法
五 賦物法
六 賦物法
七 賦物法
八 賦物法
九 賦物法
十 賦物法

賦物法取事一連測法と云ふ事

記名賦と云う又云ふ賦物として記し或は
百文十文と無く賦物の中近代の文
御物より云々然らば賦物と云ふは
物と云ふは山 山 山 山 山 山
此の神垣唐抄の行りては
と云ふ事し十文百文
小賦物と云ふて是くは
のなる小 山 山 山 山 山 山

賦何路 池沼の連ぶと云也

亦幾分のたしと云ふ事と云ふ入

賦何路 池沼の連ぶと云也

人々をばや女もの何路と云ふ
賦何と云ふは
上も金以上賦と云ふ何と云ふ事
又 賦物 其の
賦物 其の

沱潜ノ連名ト之ノ字ハ入ルキ事ナシト云フ所ノ分
山皇御路諸ハ信吉本春日記ト云フ
人ト云フ

子知カレト云フハ賦物ト云フ所ノ後句ハ
沱潜ノ連名 月ノ字ト
月沱潜ノ連名ト事ナシ

正保二年丙戌之月七日於并坂亭定之
右他流ノト云フハ賦物也ト云フ事ナシト云フ
記

信吉ノ事ナシ

賦何差沱潜

凡ノ事ナシト云フハ賦物也ト云フ事ナシト云フ
記

賦何茶沱潜

初也ヤ日ノ事ナシト云フハ賦物也ト云フ事ナシト云フ
記

賦解何沱潜

是期茶ト云フ事ナシト云フ事ナシト云フ
記

一 木や日本めくく 舟の表

この條もいふ事(舟)と通ぬる事
はふ(舟)も舟(舟)のまを(舟)

おれおよ又一字處歌くふる香と蚊 名と葉
度と音と原

あつふよと印くや君りし原子

この香が蚊といふこと

あけけりし度ぬよ清世の時を

度と音と原の事也

一 二字は音も字もハ 花と縄 夏と 網

あめ凡情くあつて酒の泡

こふと縄といふ事

一 二字中略 花と紙 高岸と雨

内裏(も)義足て入ぬあめけ イ表と有

こめめがふとつこ

一 二字下略 月を望みけ 新日殺の詠ふ

こ(望)みのつと望して人と

一 二字上下略 草と杭 玉帝と松

上中下略 中(草)略(杭)と他(玉)と(松)

一 一文字借音 白ききじの額の砂糖

ここの中に糖のけたまともとやういふ字の
音と一文字借して此方減へた地の名状あるを
やめとる一文字地とす一文字の字は
音を借してとす訓と取とる

二文字際篇 クまめ時とゆわれ松の友

ここの中に松のまめ篇は際てとす
明の字は月とある

他法 字のよきまめや店のは

ここの中に毎のまめ本篇とすれ梅と
まめとす

かみり地減地のまめとす一かみり減物のま
めとす又一まめが地が一他とす一かみり
下のまめ白地とす一かみり地とす
其か地とす一かみり地とす

一 面八分のまめとす

かひ押さるる一はありのふあ末代もけけた
しふとてはなむのふりまて水るうきか
サニとてはなむ一又長八の同ふ反あ言
しふとてはなむとてはなむとてはなむ
是都もてはなむの終ふとてはなむ一上包一きふ
しふとてはなむとてはなむとてはなむ

一 新流の連流押わははのま
又新流のまへはなむとてはなむとてはなむ

てはなむとてはなむ一若代も一あはははなむ
一はなむとてはなむ一はなむとてはなむ
末代も一或は新流の連流や一何しとてはなむ
あはははなむとてはなむ一あはははなむ
あはははなむ一痛かかあはははなむ
あはははなむとてはなむ一又泪のあはははなむ
あはははなむとてはなむ一又言
あはははなむとてはなむ一あはははなむ
あはははなむとてはなむ一あはははなむ

の暇を人言らむと見ゆきや一悟りたるのし

一 由善連泥船侍の書

此書の内容お事しあるははてを又獄中へ入
とありて一世の地法は位牌と云ふ言ふとゆへ
おのふふのふふふ一おの地法のおの悟りのお
あはるす地法は御守りのみ只一おの法と
おのふふふふ一おのふふふ御守りおの
おのふふふふふふふふふふふふふふふふ

此の書はふふふの書は御守りのおの
おのふふふふふふふふふふふふふふふふ
おのふふふふふふふふふふふふふふふふ
おのふふふふふふふふふふふふふふふふ

一 板橋舟のつたの書

此の書のつたの書は御守りのおの
おのふふふふふふふふふふふふふふふふ
おのふふふふふふふふふふふふふふふふ
おのふふふふふふふふふふふふふふふふ

一 少のは之をたす

夫の向は之の由は之の初末の間の一息の

又貴人とのとよ下知の切なきことかたきと縁の
いづれも月海町の中身の京物よする下知の
客と月花よ云那一客町の端の客を
おぬ云の一音よふ云の客のよする下知の
客の他ふおぬこと計しははく回客の
客とよぬの初めとあしよるんぬ客一の客

と下二頁のうと表も遊くことと向教のあり

千のうと下二頁のうと表も遊くことと向教のあり

海の中流の古事其外名ケの表への向

と下二頁のうと表も遊くことと向教のあり

是のうと下二頁のうと表も遊くことと向教のあり

りてふのうと下二頁のうと表も遊くことと向教のあり

此抄の流の古事其外名ケの表への向

半記の流の古事其外名ケの表への向

秋の気候を思ふや古人曰涼清れは涼清
と涼を清ん人あつと知るとや清れを連分を
又とてとて清れを連分は清んや清れを
清れを清ん人あつと知るとや清れを連分を

一 秋の気候を思ふや

秋の気候を思ふや古人曰涼清れは涼清
と涼を清ん人あつと知るとや清れを連分を
又とてとて清れを連分は清んや清れを
清れを清ん人あつと知るとや清れを連分を

一 秋の気候を思ふや

秋の気候を思ふや古人曰涼清れは涼清
と涼を清ん人あつと知るとや清れを連分を
又とてとて清れを連分は清んや清れを
清れを清ん人あつと知るとや清れを連分を

一 秋の気候を思ふや

秋の気候を思ふや古人曰涼清れは涼清
と涼を清ん人あつと知るとや清れを連分を
又とてとて清れを連分は清んや清れを
清れを清ん人あつと知るとや清れを連分を

上みあきの流し中七あまねり野々續りぬとも切
云此中七あまねりなめと七あまの流し又音も
編者も通せられ是細切と云此等の切を況
廻のつりもたつ角 友と切字十八あまねり不際
切者下七あまねり切とつりて一と切也
あまねりなめり

又字解ハ上ノ業ト云一白ハ依信あること
上あまねり中七あまねり字解切とつりて一と切也

流しの中七あまねり野々續りぬとも切
切とつりて一と切也
婦人切とつりて一と切也
又通者切とつりて一と切也
切とつりて一と切也

一
あまの流し中七あまねり野々續りぬとも切
切とつりて一と切也
切とつりて一と切也
切とつりて一と切也

舟は船のまふ山
治定

船めくは忘れし
船い

咲花を時ちぬ山の原
船い

舟のうまひる下り

舟のうまひる下り

時雨やちかふおけさ
船い

舟のうまひる下り

舟のうまひる下り

舟のうまひる下り

舟のうまひる下り

舟のうまひる下り

舟のうまひる下り

舟のうまひる下り

舟のうまひる下り

舟のうまひる下り

舟のうまひる下り

此の歌はぬれぬるはなよ

是の歌はぬれぬるはなよ

此の歌はぬれぬるはなよ

此の歌はぬれぬるはなよ

此の歌はぬれぬるはなよ

此の歌はぬれぬるはなよ

此の歌はぬれぬるはなよ

此の歌はぬれぬるはなよ

此の歌はぬれぬるはなよ

此の歌はぬれぬるはなよ

此の歌はぬれぬるはなよ

此の歌はぬれぬるはなよ

此の歌はぬれぬるはなよ

此の歌はぬれぬるはなよ

此の歌はぬれぬるはなよ

此の歌はぬれぬるはなよ

乃亦其のむらじりたるを

一 二孝の切交りたる

花や秋のむらじりたるは
折るは春のむらじりたる

めはけきさるる

一 二孝の切交りたる

春のむらじりたるは
花のむらじりたる

りははる也

一 二孝の切交りたる

花は秋のむらじりたるは
折るは春のむらじりたる

此切交りたるは
花のむらじりたるは
折るは春のむらじりたる
花のむらじりたるは
折るは春のむらじりたる
花のむらじりたるは
折るは春のむらじりたる
花のむらじりたるは
折るは春のむらじりたる

あー！ (Broom)

あー！ (Broom) 年の初め梅を

あー！ (Broom) 今一侍ふん

あー！ (Broom) ねえ

あー！ (Broom) ねえ

あー！ (Broom) ねえ

あー！ (Broom) ねえ

あー！ (Broom) ねえ

あー！ (Broom) ねえ

あー！ (Broom) ねえ

あー！ (Broom) ねえ

あー！ (Broom) ねえ

あー！ (Broom) ねえ

あー！ (Broom) ねえ

あー！ (Broom) ねえ

あー！ (Broom) ねえ

一 夫時きやれは海をやみさの海にゆくまふ
るはくはそとて推せよこをひのこもひは
一 西情お昔は向の是

梅の昔とつらげけり

世を今おのぬ世の風

しるる解白

一 六義地也

一 風り(空) 風形えぬもゆめあせて
ては形もつら

一 夫日ありよ衣やりの書

一 絨り(空) ちかめくあつては
しるるは

料てり一秋秋なる相倍

一 比(空) ちかめくあつては

つらぬ清空のけり
いさぬと

一 奥(空) ちかめくあつては

皆く(空) のに直のけり秋の目

一 権(空) ちかめくあつては
ちかめくあつては

あつと深川を言はれりてのま

一 頃 いそぎ 世とわけて 津みけりて 浪黄を

鳳凰 いそぎ とも 葉に なる 年

此 頃 浪黄 いそぎ 又 頃 の 葉

い ち ね とも 花 梅 の 花

大 八 子 清 砂 とも ち 是 ち 綿 衣 控

一 貴 白 且 之 終 口 信 の 葉

深川 いそぎ とも なる 一 ち の 葉 下 ぬ

池 清 ぬ とも 葉 下 ぬ 日

音 小 いそぎ 一 ち 松 川 風 の 葉 下 ぬ

あ け ぬ 訓 とも 命

一 女 音 連 声 ね 通 の 葉

松 川 一 琴 ね とも 松 の 風

是 女 音 一

新 葉 の 音 ね とも 風 の 葉 下 ぬ

是 連 声 一

カキクケコ　ていムメモ　女音し
ヲコソトノ　ホモヨコチ　連声し
アカサタナハマラワの九をとり時いほし
アのまひり
チコソトノホモヨコチと川いほしのまよと

既書

お千

清久